
杯の召喚士

遥那智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

杯の召喚士

【Nコード】

N6632Z

【作者名】

遥那智

【あらすじ】

故郷の村から「ある頼まれごと」のために、はるばる王都までやってきたシャルロット（ロティ）。しかしその「頼まれごと」を果たすのは簡単ではなく 召喚士（ただし条件付き）の天然少女ロティと、何故かロティの面倒を見る羽目になってしまった騎士・リノ。剣と魔法の異世界ファンタジーです。

第1話 はじめてのおつかい

「お金が……ないですっ！」

ここは大小20の州から成る、広大なイルシオン王国の王都・ロサ。

多種多様な人々や辻馬車が行き交う大通りで、その少女 シャルロットは大量の荷物を石畳に積み上げ、頭を抱えていた。

「路銀は確かに頂いたよ、毎度あり！ 幸運を祈ってるよお嬢ちゃん！」

そう言つて、最後の乗客だったシャルロットと荷物を豪快に降りし、晴れ晴れとした笑顔で去って行った幌馬車のおじさんを見送つてから、もう30分が過ぎようとしていた。

「これからどうしよう……」

生まれ育つた村から馬車で10日以上も掛かるこのロサの都に、シャルロットは『とある頼まれごと』を果たすため、やってきた。

お金がないとは言つても、別に物盗りにあつたわけではない。

初めての一人旅だからと、村人が総出で手を尽くし、評判のいい長距離幌馬車を手配してくれたし、幌馬車の親父さんもこの道数十年というベテラン。途中、乗合で一緒になつた他の乗客も皆人柄が良く、それはそれは快適な馬車旅だったのだが。

生まれて初めての村の外への旅、元来持っていた買い物好きの血が、煌びやかなアイテム達との出会いで大暴れした結果、路銀以外のお金を使い果たしてしまったのである。

休憩で立ち寄つた町ごとに、嬉々として買い物をするシャルロットに不安を抱いた親父さんが止めてくれなければ、路銀も払うこと

ができなかったかもしれない。

ちらり、と財布の中を覗く。

少女の一人旅にしては十分過ぎる程の金貨が入っていたはずなのに、そこにはもう数枚の銀貨が残されているだけだった。

村ではご馳走にありつける額だが、物価が違うこの王都では、恐らくパンとミルク代になればマシな方だろう。

シャルロットは、荷物の山の中から頑丈そうな革張りのトランクを引っ張り出すと、よいしょ、とそれに腰を下ろし、もう一度財布の中を覗きこんだ。

「宿代……にもならない、かなあ……」

そう言うと、肩を落とし、がっくりとうな垂れた。

「おや？」

昼食後、休憩時間が終わるまで腹ごなしに町をぶらぶらしていたアリアスは、道の片隅で、無防備に大荷物を積み上げ、何やら思案している少女に目を留めた。

（旅行者かな？それにしても無用心な）

いくら治安の良い王都とは言え、まだ年端もいかない少女が大荷物を抱えてぼーっとしていては、良からぬ輩の的になりやすいだろう。

自他共に認める女好き……いや、フェミニストであるアリアスとしては、そんな様子を見ては放っておけない。

行き交う馬車や人を器用に避けながら向かいの通りに渡ると、その少女、シャルロットに声を掛けた。

「こんにちは、お嬢さん。何かお困り事ですか？」

「ひゃっ！」

背後からふいに声を掛けられ驚いたシャルロットは、そう小さく

呻くと、大きく目を見開きながら、恐る恐ると振り向いた。

歳の頃なら14〜15歳、肩上でキレイに切り揃えられたプラチナブロンドの髪に、吸い込まれそうな澄んだ碧眼、『美少女』と言っても過言ではない容姿の少女であった。

（これはこれは。2、3年後が楽しみな）

値踏みするつもりはなかったが、思わずそう思う。しかしそんなことはおくびにも出さず、笑顔で再度少女に話しかけた。

「こんな所で大荷物を抱えて一人で居ては危ないですよ。ご両親やお連れの方は？」

「あ、あの、一人旅なんです」

シャルロットはおずおずと答えると、そうだ、と小さく手を打って言葉を続けた。

「すみません、お城に行きたいのですが、どう行けばいいのでしょうか」

（ああ、お城の新しい侍女かな）

町村の良家の子女が、侍女として城に奉公に出されるのは珍しい事ではない。

一人納得したアリアスは「この大通りを真っ直ぐ進むと城門が見えてきますよ」と言って指差した。

その先を背伸びしながら確認していたシャルロットは、密集した建物の隙間に、城の一角と思われる赤レンガ造りの尖った屋根を見つけると、勢いよくお辞儀して礼を言った。

「ありがとうございます！……とにかく、まずはお使いを終わらせなくちゃ」

後半は独り言なのか、そう言うといそいそと荷物をまとめ始めた。とはいえ、到底一人で運べる量ではない。

アリアスはチラリと広場の時計台に目をやり、休憩時間がまだ少し残っているのを確認すると、シャルロットの荷物をひよいひよいと抱え「城まで送って差し上げます」とウインクした。

*

「ところで君はどこから来たんですか？」

城門までの道すがら、何の気なしにアリアスはそう尋ねた。

2人は先ほどの大通りを、大荷物を抱えぼちぼちと歩いている。

「クラベル村です。お花がたくさんで、とてもきれいな所なんですよ」

シャルロットは故郷を思い浮かべながら、満面の笑みでそう答え

た。「それは随分と遠いところから。ご両親と離れてのお城勤めは寂しいと思いますが、何かあったらいつでも……」

将来有望な美少女と顔見知りになっておくのも悪くない。あわよくば連絡先を渡しておくつもりでそう言ったアリアスに、シャルロットは不思議そうな顔で尋ねた。

「お城勤め……ですか？」

「君はお城で働くために田舎から出てきたんじゃない？
ふるふると首を横に振る。

「じゃあ一体何の用事があって……」
アリアスがそこまで言うと、シャルロットは、ああ、と言う顔を

して
「王妃様にお会いするためにきました」とにこにこしながら答え

た。
これにはアリアスが不思議そうな顔で返す。

「君は王妃様の知り合い？」

しかしこの問いにも、シャルロットはふるふると首を横に振った。
その様子に、アリアスの心に徐々に不安が広がり始める。

「じゃ、じゃあ紹介状は？」

「紹介……状？」

そこまで聞くとさすがに何かに気付いたのか、シャルロットも一
気に青ざめて言った。

「も、もしかして、王妃様には簡単にはお会いできませんか!？」
アリアスは参った、という風に一度天を仰いだ、すぐにシャル
ロットの方に向きなおすと、諭すように言った。

「王や王妃は民にお優しい方とは聞きますが、さすがに紹介状も
なく、どこの誰かもわからない旅行者ではお城に入ることすらでき
ませんよ」

「ど、どうしよう……っ!」

どうしよう、はアリアスのセリフでもあった。

不安の中、とんでもない世間知らずのお嬢さんに当たってしまった
たようである。

とはいえこのまま放つてもおけない。

眉間に深い皺を寄せると、アリアスは状況を整理するために一度
立ち止まった。

「つまり君は、王妃様にお会いする為だけに故郷から出てきたん
ですね?」

「はい、お渡ししたいものがあって」

今にも泣き出しそうな顔でシャルロットはそう答える。

「うーん……献上品なら城の者に頼めば、お渡しすることは可能
かもしれませんが。」

ただ、厳しいチェックは入るでしょうから、確実に届くとは言
い切れません」

「そ、そうなんですか……」

シヨツクのあまりへなへなとその場に座り込んでしまったシャル
ロットを、アリアスは手を差し伸べながらしげしげと見つめた。

こんな少女が王妃に会うためだけに、何日も掛けて田舎から出て
きたのには、それ相応の訳があるのだろう。この少女は一体何者な
んだろうか。

そして、その腰に下がっている、3つに折りたたまれたロットに
目を留めると、少し驚いたように再び口を開いた。

「そのロット、もしかして君は精霊士ですか?」

「あ、はい、一応……」

何故か自信なさげにそう答えるシャルロット。

精霊士であれば大したものだ。この世界の力の根源である精霊の力を借り、その力を具現化して術を行使する、いわゆる「魔法使い」である。

精霊士になるためには「素質」と、より上位の精霊士の下で「修練」が必要となるため、傭兵ほど数は多くはない。傭兵10人の中に、1人精霊士がいればいい方だろう。

カラーン……カラーン。

そこまで話した時、町中に1時を告げる鐘の音が響き渡った。

アリアスはハツとして顔を上げる。

「しまった、昼休みが……とりあえず僕と一緒に来てください」

そう言うと、シャルロットの返事も聞かず、足早に歩き出した。

「は、はい！」

荷物を運んでもらっている以上、シャルロットには付いていくという選択肢しかない。慌てて残りの荷物を担ぐと、アリアスの後を小走りで追いかけていった。

アリアス「グレイ」ブラッドリー24才。

初めて女性に声を掛けたことを後悔した日であった。

第2話 貧乏くじと騎士

今日はツイてない。

職場に戻ったアリアスは、カウンター越しに、自分の目の前でぎゃんぎゃんとわめく男を横目にそう思った。

ここは、アリアスの勤め先である王立職業斡旋所。

城や一般人からのありとあらゆる依頼を取りまとめ、その依頼を遂行できる人間に割り当てられるための機関である。

自分の目の前で真っ赤な顔で怒鳴り散らしている、見るからに柄の悪そうなこの男も、仕事を探しに来た一人だ。

「だからなんで傭兵のオレ様が、お貴族様の迷子ネコを探さなきゃいけないーのかって聞いてんだよ！そういうのは生活課の方で回される仕事だろうが！」

「ですから何度も申し上げているように、今貴方にご紹介できる仕事はこれくらいしかないのです。このネコちゃんは気性が荒いらしくて傭兵課に回ってきたんですよ。腕の見せ所ですね」

優しいな声色で諭すように語り掛けてはいるが、その表情は完全に無表情である。

男の方と言うと、もちろんそんな対応に納得がいく訳もなく、先程から何度も同じ内容を繰り返すアリアスに、今に掴み掛かりそうな勢いで怒鳴り続けていた。

「ふざけやがって！！！」

王立職業斡旋所には2つの窓口がある。1つは『生活課』。

こちらは袋貼りや布縫い、露店の売り子募集など、一般人向けの生活に根ざした仕事が行われる。

そしてもう1つが、アリアスも窓口を担当している、この『傭兵課』である。

モンスターや盗賊退治などの物騒な依頼が殆どで、腕っ節の強い

傭兵達が集まる。

しかし、一口に傭兵と言ってもその実力は様々、星の数程いる『自称・腕利き』達に

相応の難易度の仕事を割り振る指標となるのが「国家資格」という制度であった。

国家資格を持つ傭兵は「従士」となり、更に従士として一定の功績を挙げた者に「騎士」の階級が与えられた。

より難易度の高い依頼や、国直下の重要な任務には全てこの「騎士」階級の者達が当たった。

もちろん階級が上がるほど割りのいい、いわゆる「おいしい仕事」も回されるため、ほとんどの傭兵は従士、はたまた騎士を目指して日々鍛錬しているのである。

当然、ただの傭兵は腐るほど存在しており、底辺に行くほど仕事の取り合いは激化する、というわけだ。

元々気性の荒い者達が多く訪れるこの課で、今回の男のように、自分の力量不足は棚に上げ、受付で騒ぎを起こす者は珍しくなかった。それを上手くやり過ごすのもアリアス達受付係の仕事の一環である。

こうやってごねた所で良い仕事が与えられる事は無いというのに、毎回無駄な時間を過ごしていることに、何故気がつかないのだろうか。

みぞまで
脳筋（肉）とはよく言ったものだ

しかし、アリアスは別にこの男のことで頭を悩ませているわけではない。

（彼女をどうしたものか……）

先程声を掛けてしまった少女の扱いについて思案していたのだ。

お金がないというシャルロットを、大荷物ごとあのまま放っておくわけにもいかず、せめて何か仕事でもあればと、とりあえず自分

の職場まで連れ帰ったまでは良かったのだが。

同僚達には「職場にナンパした子を連れ込むなよ」と盛大にからかわれ、その様子を見ていた現在攻略中のガールフレンドは、怒って今晚の食事の約束をキャンセルしてくる始末。

そんな苦勞を知らない当のシャルロットは、長旅の疲れからか、職員用の休憩室でくびくびと眠っている所だった。

しかしアリアスがシャルロットを連れ帰ったのには、もう一つ理由がある。詳細を確かめる時間はなかったが、『精霊士』であるらしいからだ。

王立職業幹旋所は各地にあれど、本部であるここですら、精霊士の登録はそう多くはない。従士や騎士など危険な任務に赴く者が、パートナーとして精霊士を求めている姿も珍しくはなかった。

それに今は精霊士を名乗る者を放っておけない「ある問題」も発生している。

もう一度大きいため息をつく。

「ちゃんと話聞いてんのか、兄ちゃん!!!」

と同時に、先ほどから怒鳴り続けている男が、更に顔を真っ赤にして、バンツ！とカウンターに手をついた。沸騰したヤカンよろしく、頭から蒸気が噴出しそうな勢いである。

「あ、まだいらしたのですか」

男の存在を完全に忘れていたアリアスは、馬鹿正直にそう言った。これにとつとつ何か切れてしまったのか、男は手を振り上げながらカウンターから身を乗り出してきた。

「この……っ」

「いい加減にしろ」

バシっという鈍い音が当たりに響く。

振り上げた男の手が、いつの間にか後ろに立っていた男にがっしりと掴まれた音だった。

そしてそのまま後ろ手にねじり上げられる。

「い、いててて……っ!」

「リノじゃありませんか、よく来てくれましたね」

アリアスは満面の笑みを浮かべ、嬉しそうな声でそう言うと、男の手をねじり上げている青年　リノに視線を送った。

リノは更に男の手をねじり上げ、その耳元で言葉を続けた。

「負け犬の遠吠えとはまさにこの事だな。ここで喚いている暇があるなら腕の1つでも磨いたらどうだ」

呆れた口調でそう言うと手を解き、男の背中を入り口の方へと突き飛ばした。

男は一瞬よろめいたが、すぐに体勢を立て直すとリノに向き直り、ありったけの眼力で睨んだ。

しかし、よくよく観察してみると、えもいわれぬ威圧感を放つその男・リノの腰には、騎士にしか帯刀が許されていない剣が見えるではないか。

「くそ、騎士かつ……！」小声でそう言うと、慌ててその場から逃げていった。

「助かりましたよ、さすが騎士様」

その様子に、アリアスは拍手をしながら笑顔で語りかけた。

「……」

このアリアスは女性にこそ紳士的で優しいが、男相手には愛想笑いのひとつもしないような男である。それは旧知の仲であるリノに對しても同じだ。

それが満面の笑みで自分を迎えているとなると

「用事を思い出した、出直す」

恐らく面倒な仕事を押し付けられる。

一瞬でそう悟ったりリノは、片手を軽くあげてそう言うと踵を返した。

「いやいやいやいや、冷たいなあ君は。ゆっくりして行ってください、紹介したい仕事もあるんです」

これに慌てたのはアリアスである。とても一介の事務員とは思え

ない身のこなしでひらりとカウンターを乗り越えたと、慌ててリノの前に回りこんだ。

珍しく必死な様子のアリアスに、リノは一層身構える。

「騎士なら他にもいるだろう」

「君ほどの騎士はそうそういませんよ」

そう言う顔には「逃がさない」という気合が込められている。なんとか帰ろうとするリノの行く手を遮りながら、びしっと手の平をリノの顔の前に突きつけた。

「5人です、5人。君が別件で王都を離れていた1カ月間に行方不明になった精霊士の数です」

「……なんだと？」

リノの目に鋭い光が宿る。アリアスはそれを確認すると「とりあえず話を聞いてください」とカウンターに目をやり、リノを促した。

「1カ月程前ですが、城からある盗賊団についての調査依頼が入りました。前々から存在は確認されていた賊ですが、最近特に活動が活発になってきたようです。それで我々傭兵課は、ある従士とそのパートナーである精霊士の二人にその依頼を任せただけです」

「そこまで言うとな数枚の登録証をリノに渡し、説明を続けた。」

「その翌日、従士は町外れの廃屋で死体で見つかり、精霊士は行方不明になりました」

渡された登録証に目を通していたリノは「分不相応だったただけだろう」と、事も無げにつぶやく。

「ええ、そう判断した我々も依頼を下ろす先を慎重に選んだのですが、やはり二組目も精霊士だけが消え、騎士は死体で。その頃から依頼とは関係のない所でも精霊士が行方不明になるという事件が発生するようになりました」

リノは眉間に深く皺を寄せて話を聞いている。

「事態を重く見た王は、精霊士一人で出歩かないよう御布令を出され、我々もそれ以降は騎士に調査を依頼することにしたんですが

……そうすると出て来ないので、奴らは。あくまで用があるのは精霊士だけのようです。

それにこの盗賊団はそこまで危険視されるような一団でもありませんでしたし、何故短期間でここまで成長してしまったのか、何が起こっているのか全く見当がつかないのです。

しかしこれ以上我々としても犠牲者を出すわけに行きませんし、もちろん放っておくわけにもいけません。君が最後の切り札なんです。アリアスが「切り札」と言う通り、リノは王国でも名うての騎士であつた。

元は騎士の最高位であり、貴族出身の者しか配属されない「近衛騎士」として城勤めをしていたのだが、自ら城を去つたという変わり者である。

「事情はわかったが、精霊士しか狙われないのならば私にも何もできません」

アリアスはその言葉を聞くと「わが意を得たり」と満面の笑みを浮かべ、リノの肩をバンバンと叩いた。

「そこは任せてください、君に紹介したい精霊士がいるんです！スキップでもしそうな足取りでカウンター裏の休憩室へと走って行くと、1分もしない内に、誰かを後ろに従えて戻ってきた。

「さ、君のパートナーです、自己紹介を」

そう言われ、ひょっこりとアリアスの後ろから顔を出したシャルロットは、カウンターに頭をぶつけそうな程勢いよくお辞儀すると、頭を下げたまま一気に自己紹介した。

「は、はじめまして！シャルロット・ベル・ブリュノーと言います！いい、一応精霊士です！みんなからはロティって呼ばれています……！」

聞かれてもいないのに、「」丁寧に愛称まで説明する。

「あ、あれ!？」

しかしロティが顔を上げるとそこには既に2人ともいなかった。

遙か前方、入り口付近でジリジリと鬼気迫る顔で競り合っている最中である。

「あんな少女を囿に使えとは、フェミニストが聞いて呆れる。私は帰るぞ」

「敵の狙いは精霊士ですよ？あんな可憐な少女精霊士を一人で放っておいたら、遅かれ早かれ捕まってしまうに決まっているじゃないですか。ならば君と一緒にいるのが一番安全です。」

君こそ見捨てるというんですか？あんな年端も行かない可哀相な少女を！」

2人は尚も小声で言い合う。

「そんなに心配なら家にも閉じ込めておけ」

「それが彼女、一人で田舎から出てきたばかりでお金もないらしいんですよ。きっと人には言えない苦勞をしてきたんですよ……。」

君が彼女とパートナー登録をしてこの依頼を受けてくれれば、支度金も渡せるし彼女の身の安全も確保できます。何より君も任務に取り組みやすくなって全てが丸くおさまるじゃありませんか！」

確かにアリアスの言っていることは筋は通っているのだが、だからと言ってこんな少女のお守りをするのは御免だ。

「あ、あの、ごめんなさい、やっぱり私なんかじゃダメ、ですよ
ね……。」

いつの間にか2人の後ろに立っていたロティは、リノのマントの端をぎゅっと握り締めながら、半泣きの顔で見上げた。

その様子に、一瞬リノもひるむ。

アリアスはその隙を付くと、リノの手を掴み、右手に隠し持っていた契約書にぐっと押し付けた。

「ばっ、やめっ……！！」

魔法処理を施されたその契約書は、淡い金色の光を発すると、中央にリノの手形を吸い込み、一層輝いた。

呆然と眺めているリノとロティの前で、その最後の行に「遂行中」

の文字を浮かび上がらせたそれは、ひらひらと床に舞い落ちていった。

「契約完了ですね」

アリアスは契約書を拾い上げながらそう言うと、にこにこしながらリノに差し出す。

正式な契約締結の証である。こうなってしまうては依頼を完了させるか、莫大な違約金を支払わなくては契約は解除されない。しかも個人都合の解除となると、当面の間の依頼停止など、痛いペナルティも発生する。

「アリアス……」

リノは怒りで肩を震わせているが、時既に遅し。

ロティは何が起こったのかわからない、と2人の顔を見比べるところとしかできず、アリアスは悪魔のような妖艶な笑みを浮かべている。端から見ると奇妙な組み合わせの3人だが、兎にも角にも、アリアスの健闘により、本日新たに騎士と精霊士のパートナーが誕生した。

この王国の行く末に大きな影響を及ぼすであろう出会いだが、それに気付くのはもっともっと後の話である。

第3話 任務開始！

抜けるような青空に、カラっとした清々しい風が心地よい早朝。悪夢のような契約の翌日、まだ日も高くなる前からリノは自宅を出た。

確か盗賊のアジトは王都の東の山中だと聞いた。場所の確たる当てるがあるわけではないし、精霊士がいないと姿を現さないという事らしいが、行動しなければ話は始まらない。

辺りに注意深く視線を巡らしながら、足早に東門へと向かった。

とにかく、アレに見つかる前に町を出なくては

しかし願い空しく、一層足を速めたリノの目に、王都と街道の境目に聳え立つ大きな石門と、そのアーチ型の門の下で石壁にもたれかかるようにして立っている「アレ」の姿が映った。

「おはようございます、リノさん！」

「何故君がここにいるんだ、ミス・シャルロット……」

アレことロティは、リノの姿を見つけると、待ってましたと顔をパツと明るく輝かせ、嬉しそうに小走りで駆け寄ってきた。まるで子犬を思わせるような、コロコロした動きである。

「はい、アリアスさんに、ここで待っていていればリノさんにお会いできるとお聞きしたからですっ！」

そんなことを聞きたいのではない。

「私は田舎に帰れと行つたはずだが？」

昨日、斡旋所を後にしてすぐ、リノは懐から金貨の詰まった袋を取り出しロティに渡した。

今回の依頼の予定報酬額の半分、という大金である。

それで田舎に帰れ、とだけ言い残し早々に別れたのだった。

「あの、でも……」

ロティはもじもじとしながら、リノの様子を伺っている。

「まさかもう使い果たしたのか!？」

買い物し過ぎて宿代がなくなりまして、という衝撃の告白は、リノのみならずアリアスをも驚愕させたのだが、さすがにあの大金を一晩で使うのは無理なはず

「ち、違います、リノさんから頂いたお金はそのままです!」

俯きがちだった顔を慌てて上げると、ロティは腰のカバンをこそごとと探った。

そして金貨の入った袋を取り出すと、それを誇らしげにリノの前に差し出した。

「お会いしたばかりの方に、こんな大金をいただくわけにはいきませんっ、私にもちゃんとお手伝いさせてください」

金貨袋を両手の平に乗せた格好のまま、懇願する。

リノは冷ややかな視線を投げると、片手でついつとそれをロティに押し戻した。

「はつきり言おう。君にそれを渡したのは善意でもなんでもない、君が邪魔だからだ。申し訳ないと思う気持ちがあるならこのまま大人しく村に帰ってくれ」

「ではこれはお返ししますうう」

その言葉にふうつと頬を膨らませると、ロティも負けじとその袋をぐいぐいとリノに押し付けた。

大きなリボンの付いたそれ(もちろんリノが渡した時には付いていなかったのだが)を押し付けあう様は、傍から見るとただの痴話げんかにでも見えるのだろうか。

朝っぱらから幸せそうなものだ 事情を知らない行商人達は、

呆れ顔で2人のやり取りを見ながら通り過ぎて行った。

「私はお使いを済ませるまで村に帰るつもりはないんですっ」

「君のお使いとやらは、簡単に済むものではないとアリアスから聞いただろう」

王妃との謁見のことである。確かにこのまま王都に留まったからといって、良い策がある訳でもない。

しかしロティの耳には届いていないようで、変わらず金貨袋をぐいぐいと押し付けていた。

リノは軽いため息を着くと、マントを翻しその攻撃を受け流した。ふいに力の押し付け所を無くしたロティは、一瞬よろける。

「とにかく。君がどうしようと私の知った事ではないが、この件に関しては手を引いてもらう。もう一度幹旋所に行ってアリアスに生活課の仕事でも紹介してもらおうだな」

その言葉を聞くと、ロティはやっと諦めたのか、俯いて「わかりました」と答えた。

リノとしても心が痛まないわけではないが、精霊士や騎士を容易く葬る事ができるような得体の知れない相手である。一人なら対応のしようもあるが、ロティがいたのでは動きが取りにくくなるのは明らかだった。

「……じゃあ私一人で盗賊さんの所にいきます！」

「!？」

何をどうわかったらその結論に達するのか。

全く会話がかみ合わない様にリノは軽く眩暈を覚える。

そして一流の騎士ですら圧倒するというその眼光で、ロティを威嚇した。

が、当のロティには全く効いていないようである。再度腰のカバンをごそごそと探ると、一枚の紙切れを取り出した。

「アリアスさんから、盗賊さんがよく目撃されている場所の地図をお預かりしました。リノさんには渡さずに、私が持っていないさいって」

そう言ってその紙切れを開いてリノの方へと向けた。

通常、依頼を受けると詳細な依頼内容が記された「依頼書」を手渡される。

しかし今回はそういった類の物が無く、与えられた情報も「都の東」などと言う曖昧なものだった。何かおかしいとは思っていたが、そういう事が

「それをこちらに渡すんだ」

「いやですうっ」

ロティはその地図を小さく小さく折りたたむと、自分の胸元に差し込んだ。

「どこに……っ！」

これを無理に奪い取るなど、警備隊に通報されるレベルである。ロティから事の次第を聞いたアリアスが、いろいろと知恵を授けたのだろう。

それにしても今回アリアスは本当に余計な事ばかりしてくれる。

狙っていた女性がリノファンだったらしく昨夜愚痴を聞かされたが、まさかその事への腹いせだろうか。

「ミス・シャルロット、君が思っている程実践は甘くはな」

「ロティとお呼びくださいっ！私、頑張って盗賊さんたちをおびき寄せますね！では参りましょう、リノさん」

見かけに寄らず強情で肝の据わった少女だな……

鼻歌まじりにロッドを組立てているロティを見ながら、リノは諦めとも感嘆とも付かないため息をもらした。

*

「も、もうこの辺でいいですかい!？」

王都から東へ30分程走った頃だろうか、御者は馬車のスピードを緩めると、恐る恐るそう尋ねた。

不本意ながらも同行を許可したことでロティはやっと地図を渡してくれたのだが、それによると、どうやら盗賊は都の東にある、廃村周辺でよく目撃されているらしい。

距離がある為、辻馬車を拾って乗り込んだのだが、物騒な噂のある地方だけに、好き好んで馬車を出してくれる御者などまずいない。

しかし盗賊以上にリノが怖かったのか、渋々ここまで乗せてくれ

たのである。

「ああ、無理を言っすまなかつたな」
そう言っす相場以上の馬車賃を渡す。

「……！またぜひご利用ください！！」

その額に目を白黒させると、先程までの逃げ腰はどこへ行ったのか、御者はキラキラと顔を輝かせながら上機嫌でそう言った。

「まずは廃村に行く。ここからは歩くぞ」

リノはそう言いながら、馬車から降りようとするロティの手を取った。

恐らく無意識なのだろう。望まぬ同行とはいえ騎士の嗜みか、女性の扱いは身に染み付いているようだ。

降り立つたその場所は廃村に程近い場所であった。

道なりに坂を上ると、数年前に捨てられた村が姿を現してくる。

村を抜けた先には、この辺り一体の領主の館だった廃屋があるらしい。

村に入った2人は辺りを見回した。風がざわざわと辺りの木々を揺らす。

山の麓にある静かな場所だ。閑静な住みやすい村だったのだろうが、今はただその静けさと、木々の葉がこすれあう音が不気味なだけだった。

石造りの家屋はどれも崩れかけ、その壁には刀傷や少し焦げたような跡があり、盗賊の襲撃にこの村を捨てざるをえなかった様を表していた。

「ひどい、です……」

自分の村がこんな目にあつたら　そう考えると胸が苦しい。ロティはぎゅっとロッドを握り締めた。

リノはその言葉に「ああ」と素っ気無く答えたが、その刹那、緊張した面持ちになると、小さな声で鋭く言葉を続けた。

「君、防御魔法くらいは使えるな？」

今までと違う、ピリツと張詰めた空気にロティも気付き、固唾を飲みながら小さくうなづく。

敵が、いるのだ。

数は……20はいるか

盗賊如き何人いようとリノの敵ではないが、ロティを守らなければならぬという足枷がある分、事は容易ではない。

しかもどんな手段を使ったのかはわからないが、騎士クラスの間が簡単に殺されているという事実もある。

「これはこれは騎士様。ようこそおいでくださいました。しかも手土産付きで」

そう言いながら、前方の暗がりから姿を現したのは、茶色のローブを頭からすっぽりと被った術士系の男だった。

フードのせいで顔まではわからないが、薄汚い笑みを浮かべているのははつきりと見て取れた。

そしてその後ろには、同じような格好の男がもう1人控えている。恐らく2人とも精霊士なのだろう、ロッドを携えこちらを凝視している。

「ご存知の通り、我々は精霊士以外に用はありません。後ろのお嬢さんを大人しく置いて帰って頂ければ、貴方に危害は加えません」
その下卑た口で、薄っぺらい口上を述べる。

「断る、と言ったら?」

「問題ありません。力尽くで奪うだけです」

男は更に卑しい笑みを口元に浮かべると、片手を挙げ、待機していた仲間に合図を送った。

それと同時に、二人の周囲をガタイのいい、見るからに盗賊という風体の男達が囲む。

そして間髪あけずに、最前面にいた5人が威勢のいい掛け声と共に2人に襲い掛ってきた。

リノはその様子に少しも臆する事もなく静かに剣を抜くと、大き

く振りかぶる。

「しゃがんでいろ」

「ひゃっ！」

そう言っつてロティの頭をぐいっと押さえつけると、勢い良く盗賊に向けて振り切った。

「ぎゃあああああっ！！」

リノの剣から繰り出される風圧は、「風」などという生易しいものではない。

まるで三日月形の刃のように鋭く弧を描き盗賊達を切り刻むと、一瞬でそれらの体を地に落とした。

「さっさと男を殺せっ！！」

つい先程まで気取った口調で喋っていた精霊士も、その光景に慌て、素に戻り声を荒げる。

リノはロティを器用に隠しながら、襲ってくる盗賊を2人、3人と鮮やかに斬り捨てていった。

「くそっ！」

もう盗賊の半数はリノの剣の前に沈んでいる。リノはと言えば息も上がっていない。力の差は歴然である。

精霊士はもう1人の精霊士に目配せすると、ロッドを構えた。そのロッドの先に緋色の光で描かれた魔法陣が浮かび上がる。

「フレイムストーム！！」

掛け声と共に、ロッドから竜のようにうねった炎がリノ目掛けて飛び出した。火の下級精霊魔法である。

「土の精霊さん、力を貸してください！」

リノの懐から飛び出したロティは、こちら目掛けて襲ってくる炎の前に躍り出ると、杖をぎゅっと強く握りしめ、力強く大地に突き刺した。

「サンドウォール！！」

その声に応えるかのように目の前の大地が盛り上がる。

勢いよく地面から噴出した大量の砂は、2人の前に分厚い壁を作

り、渦を巻いて迫ってくる炎を完全に防ぐと、ぼろぼろと崩れ去った。

「ぼ、防御くらいなら私にもお手伝いできますからっ」
震えてはいるが、キツと敵の精霊士を見据える瞳には、自分も戦おうとするしつかりとした意志が見えた。

何もできないと思っていたが、それでもないらしい。全くこの少女には驚かされる。

精霊士は矢継ぎ早に魔法を唱えて来たが、ロティの奮戦でリノには全く届かないでいた。

その間にリノは次々と盗賊をなぎ倒して行く。

「くそっ、この男はレベルが違う!!! アレを出せ!!!」
ざわり、と身の毛が逆立つような感覚がロティの全身を襲った。
リノも何かを感じたらしく、ロティと目を合わせる。

先程まで攻撃魔法を唱えていた精霊士は、いつの間にか二人揃って何かを詠唱しているようだった。

何か仕掛けるつもりか

その様子に不穏な気配を感じ、精霊士に向かって駆け出したが、リノが辿り着くより早く詠唱を終わらせた精霊士は、ニヤリと薄笑いを浮かべた。

「出でよ!!! 精霊獣ボルケイノハウンド!!!」

綺麗にシンクロした精霊士達の声と同時に、その後ろの暗がりには赤い二つの目が鈍く光った。そして次の瞬間、真っ赤に燃え盛る炎の塊がリノ目掛けて飛び掛ってきた。

「!!!」

瞬時に剣を盾代わりに構え、猛然と突進してくるその炎の塊を受ける。

しかし激しい衝撃と共に後ろに吹っ飛ばされると、リノは受身を取りながらすばやく起き上がった。

「まさか召喚士か!?!」

体勢を立て直し、自分に向かってきたそれに目を凝らす。

狼のような形貌に炎を纏い、煌々と輝くそれは、召喚士にしか呼び出すことができない聖なる獣。精霊獣に他ならなかった。

召喚士と精霊士では全く格が違う。精霊士は精霊の力の一片を借りることしかできないが、召喚士は精霊そのものを呼び出し、その強大な力を使役することができる。

努力や才能でなれるものではなく、召喚士は召喚士からしか生まれない。故にその数は極端に少なく、王国全土でも確認されている召喚士は、王妃を始め数人しかいないはずなのだが

精霊士達はリノの様子を確認すると、ロッドの先をロテイに向け叫んだ。

「あの娘を捕らえろ！」

その言葉と同時に、精霊獣は軽やかにロテイの方へと駆け出す。

リノは慌てて剣を振るったが、盗賊共を一撃でなぎ倒したその攻撃も、精霊獣の身を守る炎に掻き消され、ダメージを与えることができない。

「サンドウォール！！」

自分に向かってくる精霊獣に向け、ロテイはもう一度魔法防御壁を張った。

しかしとも簡単にその砂壁を突破した精霊獣は、子猫を運ぶ親猫のように、ロテイの襟首をくわえた。

「きゃーっ！！」

舌打ちと共にリノは再度斬りかかったが、精霊獣は事も無げにそれをかわす。

その度に口にくわえられたロテイがぶんぶん振り回されるのだった。

「め、目が回……っ！！」

「我慢しろ……！！」

しばらく飄々と攻撃を交わしていた精霊獣は、「退け！」という合図と共に高く舞い上がった。

それと同時に精霊士達がリノ目掛けて魔法を浴びせる。

何本もの炎の柱がリノを追い詰め、とうとう村の入り口まで押し戻されたリノに、精霊士は静かな声で告げた。

「それでは御機嫌よう」

「待て……っ！」

リノの叫びも空しく、立ち昇る炎の柱を斬り裂いた先には、既にロティの姿はなかった。

残っているのは、リノが切り捨てた盗賊達の残骸だけである。

「リノさん、ごめんなさい……っ」

緊張感をそぐ、間の抜けたロティの叫び声だけが、遙か頭上から響き渡っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632z/>

杯の召喚士

2012年1月12日00時53分発行